

## ニーチェの自然

須藤 訓 任

本稿はその題名どおり、ニーチェの自然観をテーマとするものであるが、何故これが殊更テーマとされなければならないのかについては、少々前置が必要とされる。

一応「ニーチェの自然」と銘打ってはいるものの、筆者が本来構想しているのは、ニーチェの思想を「自然と科学」という観点から点検しなおそうというものである。そして、あわよくば「自然と科学」についてのニーチェの初期から後期にかけての思想の転換を通して、「脱ユートピア」とでも名付けるべきニーチェの基本的姿勢の顕在化を剔出しようというものである。したがって本来ならば、ニーチェの思想の全体を、つまり一八七二年の『悲劇の誕生』から一八八八年最晩年の遺稿までを、カバーしなければならぬ。むろん今回の限られたスペースではそれは不可能なことで

ある。今回は後期のニーチェ、つまり一八八〇年代中盤の『ツァラトゥストラ』以降の思想に限定せざるをえない。それも「自然と科学」のうち自然の方のみを専ら話題にすることにしたい。それだけでも一応のまとまりはつけられるだろうからである。

本稿は「脱ユートピア」の剔出に至る一里塚にすぎない（続編は近い将来、場所を替えて発表される予定である<sup>①</sup>）。したがって、本稿の意図はきわめて慎ましやかなものである。それは、後期ニーチェが体験し思索した自然の姿をできうる限り精確に描き出すこと、このことに尽きる——ただしその際、ニーチェの体験と思索の息遣いを少しでも反映させるべく（自然観の再現にあたってはこの点は特に重要である）、敢えて多量の引用を恐れず、いわばニーチェ

本人に語らせる叙述方式を採用することにした。

\*

よく知られているように、中期の代表作『人間的、あまりに人間的』以降ニーチェは、一、二の例外を除くと、著述形態としてアフォリズム形式を採用するようになる。そこには、戸外を自由に散策しながら、思い付いた事柄を携えたメモ帳に書き留めておき、それを著作に利用するという彼の習慣が絡んでいる。自然のなかでこそ、ニーチェは自らの思想を紡ぎ出し形を整えてゆくのであり、また、そうした思索態度をよしとする。

戸外で、自由な運動の最中に生まれたのではないような思想——筋肉もまた共に加わって祭典を祝っていないような思想は、信用しないこと。(6、281<sup>②</sup>)

思考をいわば全身運動としてとらえるこの姿勢には、『ツァラトゥストラ』にいう「大いなる理性」としての身体という思想が顔を覗かせているが、そういう身体の思考が完全に開花するためには、しかるべき場が必要とされる。いうまでもなく、自然、大きく開けた自然がそれである。し

かもそれは、人間どもの騒憂から隔絶した「孤独な」自然でなければならぬ。<sup>③</sup>

しかし、自然は思想産出の場であるだけでない。思想は常に自然的事物の形象を纏って表現される。その限り、思想は何等かの形で比喩的に表現されざるをえない(既に若干の頃からニーチェは、言葉はその起源からしてメタファであり、従って、言葉を用いる思考も比喩的本質のものである、と考えていた(『道徳外の意味における真理と虚偽について』(一八七三)参照)。なぜなら、概念の包摂関係を直線的な論理に従ったものでは無い身体的思考は、事物と鋭敏な身体とのちかの接触から生まれ出るのであり、そこに誕生する思想は、一義的に意味の確定されないみずみずしい感覚(『意味 Sinn)を多数備えているのだからである。多義性を多義性のまま表現するには、比喩として語るにしくはあるまい。いわば身体と共に比喩はうまれるのである。だから、ツァラトゥストラも語る。

上へと、われわれの心(Sinn)は飛翔する。この心が、われわれの肉体の比喩、すなわち向上の比喩なのだ。もうものの徳の呼称も、このような向上の比喩なのだ。／こうして肉体は、歴史を貫いて進み行く。生成するもの、闘うものたる肉

体は。そして精神——それは肉体にとって何なのか？ 肉体の闘争と勝利を告げる伝令使、肉体の同志、銜である。／（……）わが兄弟たちよ、君たちの精神が比喻をもって語ろうとする時刻を、その都度大切に欲しい。その時刻にこそ、君たちの徳の源泉はあるのだから。／そのとき、君たちの肉体は高められ、新しく蘇る。肉体は、その歓喜をもって精神を恍惚たらしめ、こうして精神は創造するもの、評価するもの、愛するもの、そして万物に恵みを注ぐものとなる。（4、98—99）

こうして自然は、二重の意味でニーチェの思想の母胎となる——思想産出の温床として、また、思想表現の比喻内容として。自然の「孤独」は人間の邪念がはりめぐらす妨害を取り除き、静寂のなかでニーチェの思索を育むと共に、その「孤独」の静寂は自然の事物をおそろしく雄弁にし、ために、それらの事物は、静寂のなかで研ぎ澄まされたニーチェの耳にむかって、われを争って思想の形に定着されようと殺到してくる。「孤独」な自然のなかで織り成される、身体の比喻的思考——『ツァラトゥストラ』はそうした思考の生體を物語って余すところがない。そもそも全篇の始まりからして、十年間、自然のなかで「孤独」を楽し

み、知恵に満ち溢れたツァラトゥストラが、豊饒の象徴であり、その点で自身と同類ともみなされる太陽に話しかける姿を、登場させているのも、印象深いが、第三部「帰郷」では、当の「孤独」がツァラトゥストラにむかって言う。

ここ（孤独）では万物が、お前の言葉に優しく慕い寄って来て、お前に媚びる。万物はお前の背に跨って駆けめぐりたいのだ。お前は、ここではあらゆる比喻の背を借りて、あらゆる真理に向かって駆ける。

ツァラトゥストラもこれに応ずる。

ここではすべての存在を示す言葉と、言葉の箱がわたしの前に開かれる。すべての存在が、ここでは言葉になろうとする、すべての生成が、ここではわたしから話すことを学ぼうとする。（以上、4、231—232）

しかし、この「孤独」な自然は人間との交渉を離れた大いなる自然であるとはいっても、中期の『人間的、あまりに人間的』とは決定的な点で異なり、それはもはや、情念を鎮静化するために観想されるのではないし、従って、自

然の中から生み出されてくる思想も、人間の生の静謐な形をめざすのではない<sup>④</sup>。それゆえ、人間は一方的に自然のなかに没入し、また、没入可能な形に自らの生を確定すべきだ、とニーチェは考えているわけではない。一定の形に人間の生を押し込め固定するというよりは、むしろ、自然もまた自然の中から生み出されてくる思想も、人間の内なる可能性を絶えず発掘して、人間を無限に変容へと駆り立てるところにこそ、ニーチェは自然や思想の「本質」を見る。人間どもに自らの知恵を授けようとして、無理解や嘲笑あるいは逆に盲信に遭遇したのち、ツァラトゥストラは自身の一層の成熟——永劫回帰思想の告知のための成熟——を求めて、彼の「孤独」な故郷である高山の洞窟に帰ってくる。洞窟にたどり着いた彼は、溢れ出る涙をいかんともしがたい。自然の懐のうちでツァラトゥストラが泣くのも、それはなによりも、自然は彼を——そして、総じて人間の生を——より豊かなものへと変容させるはずのものだからである。

……わたしは、もう一度人間のところへ赴きたいのだ。彼らの許へと没落し、死に臨んでわたしの最も豊かな贈り物を、彼らに贈ってやりたいのだ！／このことをわたしは、太陽の

沈み行く姿から学び取った。あのあり余る程に豊かなものは、そのとき無尽蔵の富を注いで、海原に黄金を撒き散らす。——／——すると、最も貧しい漁夫さえ、たちまち黄金の糧で漕ぐのだ！いつかわたしはその光景を見、眺め入ってとめどなく涙にくれた。——(4、249)

「最も貧しい漁夫」の船までが「黄金の糧」をもつようになる、太陽のこの豊かさ——これがニーチェ晩年の自然というものの実質であった(ここで、われわれはニーチェの愛した画家クロード・ロランの金色の情景を思い浮かべてもよい。「ここトリノでは一日一日が、同じような始末に負えない完璧さと明るい太陽と共に、やってきました。燃える黄色のなかでりっぱな樹木が生い育ち、天空と大河は柔らかな青、大気は最高度に清らか——夢想だになかった一幅のクロード・ロランというところだ」と、最晩年狂気を間近に控えたニーチェの胸中を去来していたロランを、である。異様なまでにまばゆい、光りに包まれて変容した *velut in* 世界、光そのものの世界の光景——それはロランの光景であり、ニーチェの光景であった<sup>⑤</sup>。だからといってニーチェは豊かさのみを一方的に賛美しているのではない。引用にもあるように、贈り与えることには、「没落」

Untergang の影がつきまとうし、また、のちに述べるように、豊かなるがゆえの渴望や貧窮も存在するのだからである。むしろ、ニーチェは単に豊かさを求めるという以上に貪欲である。つまり、豊かであるからといって、貧しさを手放そうとしない、というか、貧しさに潜む豊かさの可能性、および、豊かさにとつて免れがたい貧しさの宿命という現実を、そのままに捉えようとする。したがって、太陽の「贈り与える徳」によって、「最も貧しい漁夫」も「黄金の糧」で漕ぐようになるとはいいいながら、その漁夫はやはり貧しいことに変わりはないし、「最も貧しい」者だからこそ、その形象には感覚的な美も心情的な感銘力も備わるのである。こうした貧しさに結実する豊かさや、逆に、豊かさのただ中に胚胎される貧しさ、といった「対立の一致」する自然の形姿のニーチェ的頂点の一つをなすのが、彼の絶唱ともいわれる「日は沈む」である。

## 一

渇き待つのも、もう長いことではない、

焼きつくされた心よ！

約束が大気のなかにある、

未知の口々からそれはわたしに息吹を送る

—— 大いなる冷氣が来る……：

わが太陽は正午、頭上に熱くかかっていた、

よくぞおとずれた、きみたち

にわかに吹き寄せる風よ

午後の冷やかな霊たちよ！

大気はみしらぬ風にきよらかに吹く。

横目づかいに、いじわるげな

誘惑のまなざしで

夜がわたしを見てはいないか？

おおしくあれ、勇敢なわたしの心よ！

たずねるな、何ゆえ？ とは——

## 二

わが生涯のこの日！

日は沈む。

はやくもなめらかな潮うしほは

金を被きて満ちる。

岩はあたたかく息づく。

おそらくは正午

幸福がそこに正午の眠りを眠っていた？

みどりの光りにきらめきながら

とびいろのきり立つ岩は、なおも幸福のたわむれをゆりあげ  
る。

わが生涯のこの日！

夕が迫る！

はやくもおまえの眼は、なかば

くもりつつ燃え、

はやくもおまえの露の

涙の雫は湧き、

はやくも白い海面を、おまえの愛の

真紅はしずかに走る、

おまえの最後のためらいがちな至福の時……

### 三

快活よ、金のいろして、来よ！

おまえ、死の

いともひそやかな、いとも甘美な、先ぶれよ！

——あまりに遠くわたしはわが道を走ったか？

足が疲労した今こそやっと、

おまえのまなざしはわたしにもう一度追いつがる、

おまえの幸福はわたしにもう一度追いつがる。

まわりはただ波とたわむれ、

かつて重かったものは

青い忘却に沈んだ、

わが小舟は今、用もなく泊<sup>は</sup>てている。

あらしと航海——小舟はほんとうにそれを忘れた！

願いと望みは溺れ、

たましいと海はなめらかに風いでいる。

### 第七の孤独！

この甘やかな安らぎ、この太陽のまなざしを、

これほど近く、これほど温かく感じたことはついぞない。

——わが山頂の水はなおも燃えて入るか？

しろがねの、かろやかな、魚<sup>うま</sup>さながら

今わが小舟は泳ぎ出てゆく……

(6、396—7)

(生野幸吉訳 一部変更)

『ツァラトゥストラ』をはじめとして、およそニーチェ

思想の自然光景を構成する鍵となる三つの風物——太陽、

大海原、高山によって開かれた世界のなかで、さまざま

モチーフを複雑に織り込んでゆきながら、終末(死? 狂

気?)の予感を濃く漂わせるこの詩作品においては、「わが山頂の水」が燃え、灼熱の光を発する。それは単に、氷が沈む太陽の光を照り返すというだけのことではないだろう。氷が冷たく凍てつけば凍てつくほど、その灼熱の光度も増大し、また、海の底へと低く、深く、太陽が沈み込めば沈み込むほど、山頂の水も一層高く聳え立つように感じられる(高みからこそ、深所の見晴らしもきくのだ)。氷は、山の高さと海の深さ、太陽の灼熱と氷自身の寒冷を、自らのうちに凝縮する。高さと深さ、灼熱と寒冷という対立する両性質が鋭く対立したままで、一個の存在のなかに凝縮する——この緊迫感こそが、ニーチェにとって、自然、より正確には、自然の「力」というものであった。なぜなら、対立したものを、対立したままにしておきながら、両立させるには「力」が不可欠だからである。「最高の賢者は、最も矛盾に富んだ者であり」(11, 26〔119〕)、「賢者は対立する規準の必然性を理解し、多くの対立の中から最も華麗な偶然を求める」(11, 26〔118〕)とか、「諸対立の支配としての最高の力が規準を定める」(11, 25〔408〕)と、ニーチェも述べる。相互に対立するものを、相対立するものとして受け入れ、しかもそれらに振り回されることなく、逆に統御し、だからといって、それらを和解させたり「止揚」することもな

く、それらの偶然性に満ちた闘争を闘争のままに戯れとして享受しうる力——この力こそ、おのれを贈り与えて人間と事物を変容させる(太陽に象徴される)あの力であろう。実際、太陽の灼熱の光を凝縮させた氷の照り返しを受けて、それまでは「用もなく泊っていた」「わが小舟」は、深い海と高い山頂の接する海面上を、「しろがね」色——氷の色!——に変容して輝きながら、魚のようにかろやかに漂い始める。あるいは、それは死への旅立ちであったのかもしれない。(事実、清書段階では、最終行「今わが小舟は泳ぎ出てゆく………」schwimmt nun mein Nachen hinaus………」は、「今わが小舟は無のなかへ泳ぎ入る………」schwimmt nun mein Nachen in's Nichts………」であった(14, 517)。しかし、いずれにせよ、最終的には死に行き着くとしても、「わが小舟」のこのあてどない漂いは、したがって、「わたし」の変容は、自然——太陽、海、山、そして氷——の力のなせるわざにはかならない。

山頂の水が燃える一方で、太陽は海の彼方に没してゆく。ものが照り輝くのは、日没時であって、日の高い昼の時間帯ではない(むしろ、物理的には朝焼けという現象もあるにはあるが)。昼にはものははっきりとした輪郭をもって明るく目に飛び込んでくるだけであって、風景が金色の情

景に一変されるのはすぐれて沈み行く太陽によってである——このことをニーチェはきわめて意義深いことに思う。

没落とは、ツァラトゥストラにとっては、人間界に下つてゆくことを意味した。自然の「孤独」のなかで育まれ、ありあまるほどに実った知恵は、人間たちに伝達され「消費」されねばならない——たとえ、そのことによって、おのが精神と身体を汚濁と疲弊の危機にさらすことになるうとも、没落の覚悟のないところには、新たな可能性を切り開くことはできない、とは『ツァラトゥストラ』のなかで幾度となく繰り返され強調されることであり、そこに、ニーチェ自身の思想家としての自覚を窺うこともできよう。豊かさ内に在るこの危うさの感覚を共有しうるか否かに、「ニーチェの自然」を理解するひとつの鍵が潜むのである。しかし他方、過剰な知恵には、まさに過剰なるがゆえに、宿命的な貧困が巢喰うことになる。過剰なる者は、おのれが豊かであればあるほど、昂じてゆく飢餓にさいなまれるのである。鋭敏なニーチェの感覚はそうした逆説的な心情に触れ、おのずから歌いだす。「日は沈む」にしてもそうであるが、「対立の一致」する心象風景を描くには、概念言語によって分析的に記述するのではなく、「歌」としてその心象風景そのものを表出するしかないであろう。『ツァ

ラトゥストラ』第二部の有名な「夜の歌」がそれである。

夜はきた。すべてのほとばしる泉はいまその声を高めて語る。わたしの魂もまた、ほとばしる泉である。

夜はきた。すべての愛する者の歌はいまようやく目ざめる。わたしの魂もまた愛する者の歌である。

鎮まることのない、鎮めることもできないものが、わたしのなかにあって、声をあげようとする。愛したい、とはげしく求める念がわたしのなかにあって、それ自身が愛のことばとなる。わたしは光なのだ。夜であればいいのに！この身が光を放ち、光をめぐらしているということ、これがわたしの孤独なのだ。

ああ、わたしが暗黒の夜であればいいのに！そうしたらわたしは、どんなにか、光の乳房を吸おうとすることか！（……）

だが、わたしはみずからの光のなかに生きている。わたしはわたしからほとばしる炎を、ふたたび飲みもどすだけだ。（……）

わたしは絶えず与えるばかりで、手を休めるひまがない。これこそわたしの貧しさだ。わたしはわたしを期待する眼ばかりを見る。わたしの見る夜は、そうしたあこがれに輝いている、明るい夜だ。これがわたしの妬みである。



おお、すべての与える者の不幸よ！おお、わたしの太陽の暗黒よ！おお、渴望への渴望よ！おお、満腹における飢餓よ！(……………)

おお、きみたち、暗いもの、闇のもの、きみたちだけが光り輝くものから暖かみをつくりだす！おお、きみたちこそはじめて光の乳房から、乳と活力を飲むのだ。

ああ、わたしのまわりには水がある。わたしの手は水のつめたさでやけどをする！ああ、わたしのうちには渴きがあり、その渴きがきみたちの渴きにあこがれる！ (4、136—138)

見られるとおり、「夜の歌」は「夜の歌」と題されてはいるが、その内容は輝ける星辰の光の充溢を歌い上げている。しかるに、星のありあまる光も、みずからを贈り与えるばかりで、贈与されることがないならば、かえって突き刺すような飢餓感に見舞われることになる。満天の星は、いかに輝けども、いな、輝きを増すほどに、世界を漆黒の闇と傲慢にぎらつくばかりの光それ自身とに分断してしまう。一方的に贈り与えるのみで、他からの贈与を受けつけず、したがって相互に交流することのない星星は、黒々とした闇の中で、そしてその中でのみ、ひたすらに輝き続ける。そこには相互の慈しみ、「暖かみ」が決定的に欠けているの

だ。他を照らしはしても互いに照らし合うことはないその光は、そのとき、逆に、恐ろしく孤独で寂寥とした宇宙空間の闇を際立たせるだろう。光の灼熱そのものが絶対零度の氷の柱を打ち建てるだろう。過剰な光は、みずからの過剰を呪い、乏しさを、欠乏こそを、渴きもとめざるをえなくなるのである。過剰なる者には貧しさが欠如している——まさにそれこそが彼の貧しさなのだ。光の充溢を歌う「夜の歌」は、こうして、一方的な贈与者の孤独と渴き(「渴望への渴望」)の嘆きへと変換する。光の充溢はそのまゝ、夜空の闇に、つまりは夜に、反転するのだ。その限り、「夜の歌」はやはり「夜の歌」であり続けねばならないし、また、ここにも、先に述べたような、対立——充溢と飢餓、光と闇、熱と冷——の凝縮された「一致」がある(同様の論調は、「最も豊かな者の貧困について」というディテュレンボスにも窺える)。

かくして自然は、豊饒の、豊饒なるゆえの変容の、化身となる。その豊饒たるや、「際限もなく浪費し、際限もなくむとんじやく、意図も顧慮もなく、憐憫もなければ正義もない、実り豊かで荒涼とし、しかも同時に不確か」(5、21)といった底のものであった(もはや、中期におけるように、自然による魂の鎮静化が唯一的目的となりえないこ

とは、言うまでもないだろう。とはいえ、それが「真の」自然像だというのではない。「一切は解釈である」と喝破したニーチェにしてみれば、自然が人間に対して示す表情はことごとく、人間の心的また身的状態の「投影」であらざるをえない（その点では、中期にいう静謐な自然も同様である。ただし、すぐ述べるように、後期のニーチェは静謐な自然を投影しそこに没入しようとするある種の人間の欲望に、いかんともしがたい弱さの徴候を嗅ぎ付けるのだ）。しかし、だからといって、人間が自然の在り方を一方的に決定する、とニーチェは考えていない。自然の方が人間に働き掛けて、人間の存在様式を変更させることもありうるからである。それは、端的に「君が長いこと深淵をのぞきこむならば、深淵もまた君をのぞきこむ」(5, 98)と言われるとおりである。しかし他方、自然とのこの交感はずしも、自然への「我を忘れた」没入を意味するわけではない。むしろ、「我を忘れた」没入は、ニーチェによれば、弱さの徴候であって、自分が没入できるものとして自然を構想してかかることは、そもそも弱者の心的メカニズムにほかならない。「人間たちもまた大いなる自然のなかへ赴く。自分を見いだすためにではなく、自然のなかで自分を失い、忘れるために」「我を忘れること」(「自分の外にいる

こと」Außer-sich-sein)が、すべての弱者、自己不満をもつ者たちの願望である。(10, 7[145])

自然と人間との交感関係においては、両者の相剋の可能性が常に残される。ということは、人間が一方的に主体で自然は客体というふうに、主客関係が確定しているのではない、ということである。主体は人間でもあれば自然でもありうる。ツァラトゥストラが自然の「孤独」の内で、その思想を發展させ精神的成熟を果たすことができるのも、自然と人間の主客関係のこの両義性・反転可能性にもとづく<sup>⑥</sup>。文字通り、自然がツァラトゥストラを育むと共に、育まれるツァラトゥストラはその成長に応じて自然を、そして自然の豊かな富を再発見してゆくのである。

こうして、人間と自然世界との「本来的な」同質性が明らかとなる。

それぞれの事象の根底にあり、それぞれの事象において表現されるそれぞれの根本的特質がある個人によって彼自身の根本的特質であると想じ取られたなら、その個人は生存全般のあらゆる瞬間を、凱歌をあげて是認するよう駆り立てられるに違いない。とすると、ひとが自分自身においてこの根本的特質をよきものと、価値あるものと喜んで感じ取るか否か、まさにこのことが問題となろう。

物理的に手を加えて自然を変形することに劣らず、人間がおのれの現状や願望を自然に投影することも、自然の変容であろう。その意味で、人間が生きたらば、自然を変容しつつ生きる、ということにはかならない。しかるに、自然もまた人間を、いや、人間のみならず万物を、つまり、それ自身を変容させてゆく。変容する力、させる力、それが自然と人間とを切り結ぶ同質性なのである。そして、その変容は、自然の場合、充溢・過剰ゆえの、したがって予測不能の変容であり、また引用にもあったように、「凱歌をあげて是認」すべき喜ばしき変容であった。ところが、すでに述べたことからして、変容する力の充溢としてのその自然も人間の「投影」であらざるをえない。しかし他方、そのときには、そのように力の充溢としての自然を投影できるだけの、これまた力が、人間には要求されよう。そして、そのような力をもった人間を生み出すのはやはり自然なのであって、そうであるからには、自然にはそもそもそれだけの力が秘められている、いや、力として自然は存在する。しかし、それもまた……と——これは明らかな循環である（力としての自然を投影する力を生み出す力としての自然を投影する……）。だが、ニーチェは意識的にこの循環を活用し、循環の中で自己を、自然を、どれだけ「よ

り強く、より悪しく、より深く、そしてまた、より美しく」（5、39）変容できるかに、人間の力の強度の証を求めようとしているかに思われる。だとするならば、人間の変容も「本来」、自然と等しく、充溢した力からなる変容であるべきはすのちである。人間と自然とに「本来」同質な、力の充溢からするこの変容——その変容の「源泉」たる溢れ出る力、それをニーチェは「力への意志」*der Wille zur Macht*と名付けたのであった。その最も雄渾な表現はやはり次の一文であろう。（11、38〔12〕）

そして君達もまた、私にとって「世界」とはなんであるかを、知っているのだろうか。私はそれを私の鏡に映して君達に見せるべきだろうか。この世界とは、すなわち、力の怪物であって、始まりもなければ終わりもなく、青銅のように固定した力の量であって、それは増大も減少もせず、消費されることなく、ただ変身するのみであり、全体としての大きさ是不変であって、支出も損失もない、しかし同様に増加も取入もない家政のごとくで、おのれの限界といえは「無」に取り巻かれ、なんら朦朧としたもの、浪費されるものではなく、無限に延長したものでなく、一定の力として一定の空間のなかに入れこまれ、しかもその空間とはどこかしら「空虚な」空間ではなく、むしろ力として遍在し、力と力波の戯れとし

と同時に一にして「多」であり、あるところでは蓄積される

と同時に他所では縮小していき、それ自身において崩れ溢れる力の海として、永遠に変化し、永遠に帰来しながら、巨大な年月をなして回帰しつつ、おのが形姿を干満させて、最も単純な形から最もいりくんだ形へと、最も静かなもの・最も凝固したもの・最も冷たいものから、最も灼熱したもの・最も荒々しいもの・最も自己矛盾したものへと突き進み、そこから再びひきかえして充滿から單純なものへ、矛盾の戯れから調和の喜びにまでもどりがたり、おのれの軌道と年月のこの同等性のうちにおいてなおおのれ自身を肯定し、永遠に回帰せざるをえないものとして、なんらの飽滿も倦怠も疲労も知らないものとしておのれ自身を祝福する——永遠の自己創造、永遠の自己破壊のこの私のディオニソス的世界、二重の情欲をもったこの秘密——世界、この私の善惡の彼岸、そこには、循環の幸福のうちに目標がないとすれば、いかなる目標もなく、円環が自分自身への善き意志をもたないとすれば、いかなる意志もない——君達はこの世界に対して一つの名前を望むのか。そのすべての謎に対する一つの解答を？自分らのためにも一条の光を望むのか、君達、最も隠れた者、最強の者、恐れることの些かもない者、まるで真夜中めいた者たちよ——この世界は力への意志であり——それ以外のなものでもない！そして君達自身もこの力への意志であり——そ

れ以外のなものでもない！

自然の豊饒は——とくに『ツアラトゥストラ』において——太陽の象徴に集約されて表現されていた。しからば、人間の充溢した力も、それに見合った命名をされ、しかるべき表現を獲得しなければなるまい。ニーチェはそうした人間の在り方を「最も包括的な魂」と呼び、こう描き出す。

……最も長い梯子を持ち、最も深所にまで降りることのできる魂。(……)——おのれの内部で最も広々と走り

回り、迷いさまようことのできる最も容量の大きい包括的な魂、喜んで偶然の中へ身を投げ込む最も必然的な魂。——

——生成の流れに自らを浸す確固と存在する魂。意欲と願望へと意欲する所有する魂。——おのれ自身から遁走し、

最も大きい円を描いて、おのれ自身に帰りつく魂。痴愚の甘い語りかけにとつともなく心曳かれる、最も賢明な魂。

——おのれ自身をこよなく愛し、しかもその内部に万物の流転と再来、引潮と満潮を宿した魂。—— (4、162<sup>㉞</sup>)

もはや、くだくだしい注釈は不要であろう。必然と偶然、存在と生成、逃走と帰還、賢明と痴愚——こうした緊張した対立関係を一身に担った魂。ニーチェにとって、豊饒の

実体が何であるかを、これほど直截に語っているテキストもめずらしい。「これこそが、ディオニュソスそのものの概念なのだ」(6、34)。これは、上の「最も包括的な魂」の箇所から自ら付したコメントである。このような対立関係を凝縮する力をもった「心情の天才」ディオニュソスに触れると、人は誰もが、より豊かになる。が、「それは恵みを施されたり不意をくらったというのではなく、また、他人の財貨を恵まれたとかそれに圧迫を受けているというのではない。むしろ、自分自身により豊かになり、自分自身が以前より新しくなって、ほとぼしり、氷解の風に吹かれて暴かれたということなのだ。もしかしたら、そのとき人はより不確かになり、より脆く壊れやすいもの、壊れてしまったものになっているかもしれない。しかし、いまだ名のない希望に、新たな意志と流れに、敵意と逆流に、満ち満ちているのだ」(5、237)。なぜなら、対立を凝縮させて両立させるという以上、ディオニュソスは、対立の一方に加担するならば切り捨てられることになる他方のものをも保持し、そのことによって、他方の中に潜んでいる「隠され忘れた宝を、善意と甘美な精神性の滴を、濁った厚い氷の下から探り当てる」からであり、いわば、「多量の泥と砂の牢獄の中に長いこと埋もれていた金の粒を一つとして逃

さず発見する占い棒」(同上)とでもいえる存在だからである。

こうして、「本来」同質である人間の魂と自然とが交流し、交感しあうとき、両者は互いに互いを反映しあうようになる。そして、おのれが反映された自然の中で魂はのびやかに遊ぶ(「一切が遊戯となる魂」(10、17〔40〕)と共に、自然は自然で自身を魂の中に移し入れるいっぽうで、充実した魂の照り返しを受けて美しく輝くであろう。その模様を活写した箇所を最後に掲げ、この小論の締めくくりとしたい。

おお、わたしの魂よ、わたしはおまえにあらゆる太陽を、あらゆる夜を、あらゆる沈黙を、あらゆるあこがれをふりそいでやった。こうしておまえは葡萄の木のように生長した。おお、わたしの魂よ、おまえはいまあまりにも豊かに、重たく立っている。ふくらんだ乳房さながら、つぶらに熟れた金色の実を房なりにした葡萄の木だ。――

みずからの幸福に圧迫され、充溢のあまり、じっと待っている。その待っていることにも、羞じらいをにじみださせている。(……)

おお、わたしの魂よ、わたしはおまえの憂鬱の微笑を理解する。おまえのあまりにも豊饒な富そのものが、いまはかえ

ってあこがれの双手をさしのべるのだ!

おまえの充実が、波立つ海のかなたを見わたし、探し、待っているのだ。おまえの目が微笑する天空には、過度の充実からのあこがれが窺っている! (……) おお、わたしの魂よ、おまえは歌わねばならない! (……)

——歌うのだ、ごうごうと鳴りとよまず歌で。ついにすべての海が鳴りをひそめ、おまえの歌に耳を澄ますようになるまで、——

——そして、ついには、静かな、あこがれに満ちた海に、小舟が浮かびだす。それは金色の奇跡だ。その金色をめぐって、善きも悪しきもあらゆる奇妙なもののどまがとびはねる、

——多くの大小の生き物ども、身軽く奇妙な足をそなえて、紫色の潮路をすべてのできるものたち、——

——かれらはみな金色の奇跡をめざして行く。それは「自由なる死」の小舟であり、そこには主人が乗っている。主人は、ダイヤモンドのナイフを手にかけている葡萄摘みだ。——

——それはおまえの大きいなる救済者だ。おお、わたしの魂よ、まだその名を持たぬ者だ。——未来の歌がはじめてかれの名を見いだすことになろう! そしてまことに、おまえの呼吸にははやくも未来の歌のかんばしいいぶきが通う。

(4、279—280)

① なお、拙論「琥珀のなかの虫——ニーチェ中期のニートピア」(『大谷大学真宗総合研究所紀要』第七巻所収)は、中期のニーチェ思想を「自然と科学」の観点から検討したものである。あわせて参照いただければ、幸甚である。

② 引用は Nietzsche Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe の巻数および頁数を載せる。ただし、遺稿は巻数のあと、断章番号を挙げる。また、翻訳は白水社版ニーチェ全集および岩波文庫版『ツァラトゥストラはこう語った』を参照した。全面的に従っているところもあるし、ある程度改変したり、殆んど私訳といってよいものもある。

③ 前期『悲劇の誕生』にみられる自然とは、人間をも含めて万物が一体化する根源的存在であったが、中期になるとそれは、人間的狼狽を離れた「孤独な」自然として規定されることになる。「孤独」ではある限り、後期の自然と中期のそれとは通底するものをもっている。

④ 前掲拙論参照。

⑤ クロード・ロランについては前掲拙論の付論「ブッサンからクロード・ロランへ」参照。

⑥ 『ツァラトゥストラ』第二部「舞踏の歌」における「生」と「知恵」の相互反転(入れかわり)を参照。

⑦ ちなみに、魂のこの描写に対応する世界の姿とは次の如くであろう。「どんな夢もまだ及んだことのない遠い未来、どんな芸術家が夢想したよりもっと熱い南国、神々が舞踏し、衣をまとうことを恥とするかなた。——/(……)そこでは、

一切の生成が神々の舞踏であり、神々の気まぐれであると思われた。そして世界は、一切の繋縛から解き放たれて、本来のおのれのすがたにたちかえるところ、——／——あまたの神々が永遠の追いかけっこを演じているところと思われた。あまたの神々がたがい拒否したり、また耳を傾け、仲直りしたりする至福の境地と思われた。——／そこでは、一切の時間が、瞬間に対するたのしい嘲笑だと、わたしに思われた。そこでは、必然が自由そのものであり、自由の刺とたのしく遊びたわむれるように思われた。——／そこでは、わたしはわたしの昔なじみの悪魔であり宿敵である「重力の魔」や、

かれが創造した一切のものにふたたびめぐりあった。すなわち、強制、規定、必要、結果、目的、意志、善悪などにも。——／なぜなら、踊るには、何か踏まれるもの、踏みすてられるものがなくてはなるまい？ 軽快な者、最も軽快な者たちがあるためには——「もぐら」ども、重い「小びと」どもが存在しなくてはなるまい？」(4, 247—248) ここでは、必然と自由、神々の乱舞と「重力の魔」、等の対立関係が凝縮されている。

(本学助教授 西洋哲学)

(平成三年一月十日受付)